

丸める話二つ

— 民生委員のたわごと —

田崎実三郎

私たち民生委員は地域社会を明るくし、人間関係を円滑に丸めることも大切な役目です。それにしても、こういった仕事にはいろいろの思い出話がつきまとうものです。そこで最近の話を一つ二つ……

善悪が仇になりかねないということ

中学を終えやつと更生した母子家庭があります。母は失対労働に勤め、子供は現在、夫々就職して生活は一応安定しています。長男はすでに成人になり、今年はいじめて住民税がかりました。私は彼に公民になつた誇りと納税の大切なことを話しました。第一期分は納めましたが第二期分はしぶりました。聞くところによると、組合の人が免税してあげるといわれたらしいのです。しかし、それが実現しなかつたのか彼は一カ月遅れて納めました。これを聞いて私は残念に思いました。

天井の梁を見上げると



折角、十年以上の才月をかけて更生した筈の人が、その喜びと有難さも思いつたらずいまでも依頼心を捨て切れずにいること。それと、これに対して余りな善意を施される周囲の人のことのあることに対してです。それというのも、こんなことが、結果的には本人の本質な更生を遅らせるばかりではないかと真剣に考えるからです。

幾度か天井の梁を見上げては死を決意したというのです。たまたまそんな時にT子さんが私を訪ねてきました。男の身勝手なエゴイズムがいかに家庭を暗いどん底に突き落とすものか、まざまざとその事情を打明けられました。私は二時間余りもか、T子さんの話を聞いてあげていると励ました。やつと彼女も元氣を取り戻して帰りました。その後、T子さんの家を訪ねては細かい相談にも応じ、ご主人の反省も促したりしました。結果は円満におさまりました。

つても、私はつい天井の梁とT子さんの顔を交互に見ることがありますが、それも昔の笑い話かかつての暗い表情のひとカケラも見当たらない程T子さんはすつかり笑顔を取戻したようです。(民生委員・熊本市出水町)

文化の日に

県近代文化功労者を表彰

「教育や医学、美術など近代文化に貢献した本県出身者や在住者を表彰しよう」という県近代文化功労者の表彰が、さる十一月三日文化の日に行われた。この表彰は昭和二十三年から始つたもので、今年には次の五人(うち故人三人)が表彰された。

- 山田珠一氏 慶応元年大分県西国東郡草地区生まれ。済々黌卒業後九州日々新聞に入社、二十七才の若さで社長になり新聞経営に手腕をふるつた。かたわら政界に入り熊本市長も二期つとめ、熊本の特産物奨励のため勸業館をつくり、また各官庁の誘致、産業道路の開発に努力した。昭和九年、市長在職中に七十才でなくなった。

- 百瀬葉千助氏 明治六年北海道に生まれ札幌農学校を出た。三十才の時阿蘇農業学校に赴任、亡くなるまでの十八年、一貫して阿蘇地方の畜産林業の発展につくし、特に牧草としてクローバーを移植した。

- 安永信一郎氏 明治二十五年熊本市洗馬町で生まれた。二十才すぎで短歌に進むことを決意。大正六年尾上柴舟の「水鏡」に入つてから個性的な作品を発表、熊本短歌界に新風を送りこんだ。七十才。

- 杉本彦治氏 肥後のあか牛の育成につくした功績は大きい。天保十三年鹿本郡田底村宮原に生まれた。師範学校卒業後、阿蘇郡の各小学校を回つて教師に教授法を指導。明治十八年公職をやめ「涵養齋」という塾に力を注ぎ、五十九才でなくなった。

- 小畑惟清氏 明治十六年宇土郡宇土町に生まれ、済々黌、五高、東大と進んだ。同郷の浜田玄達博士の教えを受け、博士が亡くなつたあと大正八年から東京駿河台の浜田病院長をしている。東京都医師会長、日本医師会長、東京都公安委員長など歴任、三十三年藍綬褒章をうけた。七十八才。



切り炭

最近では電気やガス、石油等の進出に木炭は押され気味。生活様式も変つてきたし、あの大きな炭タワラを嫌がる家庭も多々。アパート等では置き場もない。そこで登場したのが「切り炭」だ。いわば木炭の、巻き返し作戦、というわけ。樫は六糎、雑は七糎に切り揃えて、七・五キロの紙袋に入れてあるので取扱も便利でいい。たゞし値段は一寸張つて三五〇円位。「しかしクズが出ないから、かえつてお徳です」と生産者は云う。「切り炭」は他県で

も早くから手をつけて関東・関西に出荷していたが、県内でも三十三年頃から天草や球磨で試験的につくり始めた。長崎や京阪神に出荷したのがはじまり。最近では鹿本郡でもつくり始めた。今年の生産目標は木炭全生産量の四四・二四〇〇トン。県計画では、昭和四十年年度には「切り炭」を七〇%にまで増やす計画だ。国や県でも切断機械の設備資金に補助金を出すなどして大いに奨励している。「切り炭」もこういう新しいアイデアのようだが、もとをたゞせば、昔から愛媛で茶の湯用につくっていた短い木炭が「切り炭」の元祖というから面白い。(林産課)

交差点



これは県が印刷して料理店、カフェ、バー、飲食店、旅館等の経営者に交付しておき、お客から料金と料理飲食等消費税(従来は遊興飲食税が本年五月からこのように改称されました)を受け取つたとき、渡す領収証のこと。この公給領収証には、遊興、飲食、宿泊等の料金の内訳と税額が明細に記入され、一葉ごとに通し番号が印刷され、複写式となつているので、お客から支払われた税金は、公給領収証の控によつて確実に県へ納められ、県民のために使われるという

仕組み。だから、店では必ず公給領収証を発行し、お客の方でも忘れずにこれを受け取る。県でも毎年十一月から十二月にわたつて「公給領収証完全交付(受領)運動」などを行つて、皆さんの理解と協力をお願いしている。年末にかけては、そとで飲む機会も多くなるので、特にこれを受取ることをお忘れなく。(税務課)



公給領収証



国民宿舎

世はまさに旅行ブーム。それは交通機関の発達、生活水準の向上、生活を楽しむ風潮など、いろいろの理由から一寸した観光地はいつも大にぎわい。だが旅行するのにも問題になるのが「旅館」。料金が張つては、乏しい予算の家族づれや若い人々の旅行には一寸フツコロも痛むというものがそこぞ「そんなお方はどうぞこちらへ」と政府の融資を受けて県や市町村が建てた「旅館」

いま全国には百四十の「国民宿舎」があり、若い人たちの間では特に好評である。県内でも、阿蘇の地獄温泉に長陽村がいま建設にとりかゝろうとしており、来年の春には収容人員約五十名、鉄筋コンクリートのデラックスな「国民宿舎」がおめえする予定。(観光課)

温泉地がよく見かけるあの地下から、噴出して蒸気や熱湯を利用して発電する方法がこれ。最近八幡製鉄と共同で、この地熱発電の調査を進めることになり、にわかクローズアップしてきた。すでに十月からボーリングを実施しているが、三十八年度から本格的な発電用ボーリングをする予定。地熱発電は他の水力、火力、原子力の各発電にくらべて、コストが半分以下

地熱発電



下という低さであるため、有明臨海工業地帯で使用する電気も、この地熱発電でまかなおうと計画されている。外国の実例を見ると、イタリ、ニュージーランド、アメリカで地熱発電の実用化が成功しており、わが国では昭和二十六年に、通産省工業技術院が、別府で三十KWの発電に実験的に成功しているが、まだ実用化の例がないのでトップバッターとして大いに期待されている。(工鉱課)